

1 D - 15

熱性けいれん発作重積症の長期予後

神奈川県立こども医療センター神経内科

○山下純正 山崎 伸 宮川恭一 高梨愛子
○三宅捷太 ○山田美智子 ○岩本弘子

けいれん発作を来たしうる基礎疾患が推定されない児の熱性けいれん発作重積症（以下、重積症）について脳波所見の推移を合せ予後を検討した。対象：1975年4月より1985年3月まで10年間に熱性けいれん重積症のために当院に緊急入院した症例の中より、前方視的に最低5年以上の経過を観察された児であり、重積症発症前に明らかな神経学的異常もしくは発達遅滞（CP・MR・小頭症など）のある例は除外し、CT scan 上けいれん発作を来たと推定される症例も除外した。ただし、単純性熱性けいれんの既往は除外条件としなかった。また、経過より明らかな脳炎及び脳症と考えられる例も除外した。これらの条件を満たした症例は45例（男児17、女児28）。経過観察期間は5年0ヵ月より15年8ヵ月（平均8年3ヵ月）。最終観察時年齢は6歳0ヵ月より16歳11ヵ月（平均10歳0ヵ月）。これら症例を臨床症状及び脳波所見より以下の3群にわけて検討した。①有熱性けいれんのみで経過中も明らかな脳波異常を示さなかった群（FC群）。ただし、pseudopetitmal patternやphantom discharge は異常脳波とは考えなかった。②有熱性けいれんのみで経過中に明らかな脳波異常を示した群（EP-FC群）。③経過中複数回の無熱性けいれんを来した異常脳波所見を示した群（EP群）。結果：FC群は9例（20%）、EP-FC群は23例（51%）、EP群は13例（29%）であった。各群の重積症の平均発症年齢はFC群で1歳1ヵ月、EP-FC群は2歳2ヵ月、EP群は1歳4ヵ月だった。FC群で平均発作回数3.6回だった。EP-FC群では重積症を反復したのは7例、平均発作回数3.0回だった。重積症における一側けいれん症状を示したのは9例（39%）。脳波異常発来は平均4歳1ヵ月の時点であった。EP群では重積症時に一側けいれん症状を示したのは8例（62%）と高率だった。てんかんの発作型は全身強直間代発作1例、一側けいれん2例、二次性全般化発作3例、複雑部分発作7例。無熱性けいれん発症年齢は平均4歳8ヵ月。結語：この重積症の予後は良好な一群がある一方で、29%にてんかんの発症がみられ、しかも4歳付近に複雑部分発作の発症が多くみられた。その年齢はEP-FC群での脳波増悪時期と一致した。

1 D - 16

閉眼過敏性てんかんの検討

松山赤十字病院小児神経科

同小児科*

○荻野竜也 西林洋平*

脳波上、閉眼過敏性を認めるてんかん患者の臨床的特徴を明らかにする目的で、最近経験した閉眼過敏性てんかんの5症例(M1, F4)につき検討した。

5例中2例に痙攣の家族歴が認められた。てんかん分類では1例は特発性全般てんかん、他の4例は症候性部分てんかんであった。てんかんの発症年齢は生後6ヵ月から14歳1ヵ月、平均7歳10ヵ月。経過中認められた発作型はGTC、単純部分発作、複雑部分発作、片側痙攣、pseudo absenceが各1例で、二次性全般化発作が3例、詳細不明が1例であった。この内1例のみで閉眼によりpseudo absenceが誘発された。発達は全例正常であった。

脳波上検出されたてんかん波は1例で2.5-4c/s diffuse sp-w(DSW)及びmultiple sp-w(DMSW)が、他の4例で焦点性棘波とDSW、DMSWが共に認められた。焦点性棘波の焦点としてはFが4例、Cが3例、Pが2例、O、T、Pが各1例であった。脳波上の閉眼過敏性の出現年齢は7歳9ヵ月から14歳4ヵ月、平均11歳6ヵ月であった。閉眼によって誘発されたてんかん波としては全例でDSW、DMSWが、1例で広汎性棘波が誘発された。1例では両側前頭部に先行部位を認めた。閉眼過敏性の他には光過敏性と図形過敏性を各2例で認めた。また、4例ではHVによる増強賦活が認められた。

発作予後は全例良好で、追跡時に9ヵ月から7年8ヵ月、平均28.4ヵ月間発作は抑制されていた。追跡時処方、VPA単剤が4例、VPAとCBZの併用が1例であった。この1例を含め2症例でCBZ導入後に閉眼過敏性が出現したが、内1例はCBZ中止後も残存していた。脳波予後は発作に比して悪く、全例追跡時脳波で閉眼過敏性が認められた。

まとめ：我々の検討では、閉眼過敏性を呈したてんかん患者の多数を部分てんかんが占め、その焦点部位としては前頭部、中心部が多かった。光過敏性を伴ったものは5例中2例と、少数であった。閉眼過敏性てんかんの発作予後は良好であったが、脳波予後はさほど良くはなかった。